富士参詣の道を往く

赤色立体地図で見る

全体版：御内八海

世界遺産富士山

日本の“象徴”富士山は、2013年6月、世界文化遺産に登録された。太古から信仰の対象として人びとに崇められ、数多くの芸術作品を生み出している。世界文化遺産「富士山」は、登山道を含む富士山の山域だけでなく、山麓にある浅間神社や、湖など、25の構成資産・構成要素から成り立っている。点在するこれらの構成資産などの間を結び付け、古より富士山へと参詣に訪れる人びとが通った信仰の道が、いわゆる巡礼路である。

構成資産・構成要素一覧

No	名　称	所在地
1	富士山域	山梨県・静岡県
1－1	山頂の信仰遺跡群	山梨県・静岡県
1－2	大宮・村山口登山道（現在の富士宮口登山道）	静岡県
1－3	須山口登山道（現在の御殿場口登山道）	静岡県
1－4	須走口登山道	静岡県
1－5	吉田口登山道	山梨県
1－6	北口本宮冨士浅間神社	山梨県
1－7	西湖	山梨県
1－8	精進湖	山梨県
1－9	本栖湖	山梨県
2	富士山本宮浅間大社	静岡県
3	山宮浅間神社	静岡県
4	村山浅間神社	静岡県
5	須走浅間神社	静岡県
6	富士浅間神社（須走浅間神社）	静岡県
7	河口浅間神社	山梨県
8	富士御室浅間神社	山梨県
9	御師住宅（旧外川家住宅）	山梨県
10	御師住宅（小佐野家住宅）	山梨県
11	山中湖	山梨県
12	河口湖	山梨県
13	忍野八海（出口池）	山梨県
14	忍野八海（お釜池）	山梨県
15	忍野八海（底抜池）	山梨県
16	忍野八海（銚子池）	山梨県
17	忍野八海（湧池）	山梨県
18	忍野八海（濁池）	山梨県
19	忍野八海（鏡池）	山梨県
20	忍野八海（菖蒲池）	山梨県
21	船津胎内樹型	山梨県
22	吉田胎内樹型	山梨県
23	人穴富士講遺跡	静岡県
24	白糸ノ滝	静岡県
25	三保松原	静岡県

富士山と富士講

江戸時代（1603年～1868年）の中期以降、長谷川角行（かくぎょう）ゆかりの地を巡拝する富士講が、庶民に人気を博した。当時、富士山を信仰し登山を望む人びとは、旅の費用を用意する必要があった。そこで、仲間たちで毎月お金を集めて、くじに当たった代参者が富士山に登る「講」を組んだ。

江戸時代から今日まで、富士山には多くの富士講の講員が訪れている。

「御内八海」

富士山麓の八つの湖沼を巡る修行のことを、「内八海巡」、昔ながらの呼び名で「御内八海」という。16世紀後半、富士山の神のお告げにより、長谷川角行が富士山麓の八つの湖沼で水行を行ったことに基づくと伝えられる。

八つの湖沼は、一般的には、山中湖、明見湖、河口湖、西湖、精進湖、本栖湖、四尾連湖、須戸湖とされ、時代が降ると、須戸湖に代わり泉瑞が内八海の一つに数えられるようになった。北口本宮冨士浅間神社の手水舎には、泉瑞の湧水が引かれている。

なお、河口湖では、母ノ白滝も信仰の対象となっている。

※泉瑞は演習場内にあり、立入が制限されています。

明見湖での行の様子

REBIRTH! 富士講プロジェクト

世界文化遺産「富士山」の理解を促進するとともに、構成資産をつなぐ巡礼路等を活用した新たな富士山観光を推進するため、「REBIRTH!富士講プロジェクト」がスタートした。

多くの方々に、富士講文化の一端に触れ、「富士山は神聖な御山、信仰の御山である」という認識を高めていただくことを目指し、ツアーの造成支援やガイド研修の実施等に取り組んでいる。

スポット1 構成資産・構成要素：1-7～9、11、12、13～24

自然

富士山の誕生

富士山は4つの異なる火山が重なってできたと考えられている。年代順にまず「先小御岳火山」が、現在の富士山の北側に誕生。そこに「小御岳火山」が重なり、さらに約10万年前頃から「古富士火山」が活動をはじめ、山頂からの爆発的な噴火を繰り返しながら小御岳を覆う一方、大規模な山体崩壊が起きるなど、2万年前頃までは成長と崩壊が繰り返された。

約1万年前頃活動を開始した「新富士火山」は、粘り気の少ない玄武岩質の溶岩流を大量に流出させて広い裾野を形成した。その後の度重なる噴火で優美な円錐形の成層火山体を完成させたとみられている。

このように富士山が独立峰として類い稀に高く美しい姿になれたのは、三つのプレートが重なり合う地球上でも珍しい地点にあることや、4階建て構造の火山であること、流れやすい玄武岩の溶岩でできていることなど、様々な要素が奇跡的に重なり合ったためである。

大噴火による湖の誕生

本栖・精進・西湖の3つの湖は、水面の標高が同一であることから、遥かな昔に「古剗の海」（こせのうみ）という富士山北西面を取囲む巨大な湖であったと考えられる。その東方には古い河口湖が存在した。忍野八海は忍野湖が干上がったものとみられている。これらの湖沼は、富士山の伏流水や周辺の山々からの陸水を溶岩が堰き止めて形成された。

河口湖は、船津溶岩の流下により、縄文時代前期から中期（6,000～4,500年前）の遺物を伴出する船津浜中村遺跡を覆って、河口湖の南岸を堰き止めて現在の形になった。

古剗の海には溶岩が流入し、本栖湖と剗の海に分断した。そして、次の貞観大噴火（864年）で流れ出た膨大な青木ヶ原溶岩は、富士山北西麓にあった剗の海に流入して大半を埋め、残った部分が西湖と精進湖となった。その後に流出したとされる鷹丸尾溶岩流は、桂川上流部を堰き止め、山中湖が誕生した。現在の富士五湖の姿は、富士山の火山活動を反映している。

青木ヶ原樹海

西暦864年の貞観大噴火でできた約30km²に及ぶ溶岩地帯の上に形成された原始林が青木ヶ原樹海。ツガ、ヒノキなど針葉樹にミズナラなど広葉樹が混ざる混合林で、溶岩の隙間のわずかな土壌や苔むした倒木の上に樹々が必死で根をはる姿など、若い火山の富士山ならではの貴重な森の様相を観察できる。

スポット2 構成資産・構成要素：7

古代―遥拝

富士山信仰の起こり

奈良時代の末期から平安時代にかけては、富士火山帯の活動期であった。富士山の火山活動は、文字資料に残されたものだけでも十数回に及び、そのうち延暦19年（800）・貞観6年（864）の噴火は、宝永4年（1707）のものと合わせて三大噴火と呼ばれる。

古代における最も大規模な噴火は貞観6年に始まったもので、精進口登山道一合目付近の側火山長尾山（1,424m 鳴沢村）などの噴火であり、北面の甲斐国側の噴火であった。当時の駿河国からの報告によると、溶岩流が甲斐との国境に達したとしている。一方、甲斐国からの報告では、溶岩流が本栖・剗の両湖を埋め魚亀は皆死に、さらに人や家に甚大な被害を与えながら東の河口湖方面に向かったという（『三代実録』）。

この大噴火は卜占の結果、駿河浅間明神（現富士山本宮浅間大社）神職の祭祀怠慢によるものとされ、駿河国と同様に甲斐国司にも奉幣解謝が命じられた。これにより、翌年八代郡に浅間明神が祀られ、それから11日遅れて山梨郡にも浅間明神が祀られた。八代郡に建てられた神社が河口の浅間神社、山梨郡に建てられた神社が一之宮（笛吹市）の浅間神社だと考えられている。

富士山の女神

富士山にかかわる神の古いものは、『常陸国風土記』の福慈神（ふじがみ）や『万葉集』に見える不尽神などがある。

平安時代になると、山神の名は「浅間大神」とか「浅間明神」という神名へ変化する。神名の変化は噴火や火山活動にかかわる神の意識化であったといえる。浅間大神は「アサマノオオカミ」と読み、「アサマ」とは群馬・長野県の浅間山のように火山を意味する言葉であるという。

浅間神社は、通常の山岳信仰に見られるように、標高の高い山中に祀られた山宮と、集落の発達した所に鎮座する里宮とが対をなして祀られている。現富士宮市の富士山本宮浅間大社は同市山宮に鎮座する山宮浅間神社とかつては一体であったとされる。山梨県下の浅間神社も、一宮町（笛吹市）や富士河口湖町の神社では山宮御幸や山宮祭などの祭祀を伝えている。

浅間神社の祭神は「コノハナサクヤヒメノミコト」（木花開耶姫命）とされる。神話の中では、父はオオヤマズミノミコト（大山祇命）、夫は天孫のニニギノミコトとされる。サクヤヒメは火の中で神子を無事に出産した。火を鎮める力のある女神として、霊峰富士山を譲られたという。『竹取物語』や「かぐや姫」の伝説の中にも富士山の仙女として語られているものがある。

木花開耶姫命像
（富士吉田市歴史民俗博物館（ふじさんミュージアム）所蔵）

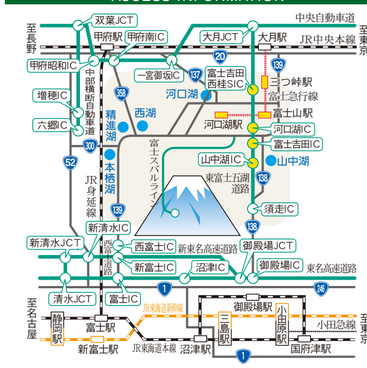
スポット3 構成資産・構成要素：1-1

中世―登拝

御山に登る

富士山などの霊山に信仰登山することを「禅定」（ぜんじょう）といい、古代においてそれを中心的に行うのは修験者たちであった。噴火が収まると、先達に引率されて一般の人びとも盛んに登山するようになる。そのような登山者を道者（導者）といった。北面の出来事を記した『勝山記』によれば、明応9年（1500）6月には、「富士へ道者参ること限りなし」であったが、関東の戦乱によって北口・吉田に到着するはずの道者が須走に迂回したとある。なお、この年は庚申年で富士山の「縁年」にあたる。縁年は富士山の全容が出現したのが孝安天皇92年の庚申の年だとする縁起に由来し、この明応9年が庚申登山の初見である。

ACCESS INFORMATION



富士山世界遺産センター
Fujisan World Heritage Center

山梨県立富士山世界遺産センターは、世界遺産の価値をわかりやすく紹介する施設です。富士山の自然と人の関わりの歴史とその広がりを感じることができます。

富士河口湖町船津6663-1
TEL:0555-72-0259　FAX:0555-72-0211
WEB：http://www.fujisan-whc.jp

監　修

山梨県立富士山世界遺産センター　堀内　眞
富士河口湖町教育委員会　杉本　悠樹

お問い合わせ

山梨県富士山世界文化遺産保存活用推進協議会
事務局：山梨県県民生活部世界遺産富士山課
TEL:055-223-1316

TOKYO2020 応援プログラム

表紙の右下は、REBIRTH! 富士講プロジェクトのマスコットキャラクター「みろくくん」です。
作画：吉田葉子

八葉九尊の世界

富士山の噴火口は、「内院」と称される山上の聖域で、大日如来（浅間大神、浅間大菩薩）が座すと考えられた。さらに、噴火口をとりまく八峰は、仏の台座である蓮の花弁にたとえて「八葉」と呼ばれ、各峰には釈迦如来・弥勒菩薩（北面）、薬師如来（東面）、観音菩薩（南面）というように、仏尊の名が冠されていた。人びとは、この仏の世界に入るために、こぞって山頂を目指した。

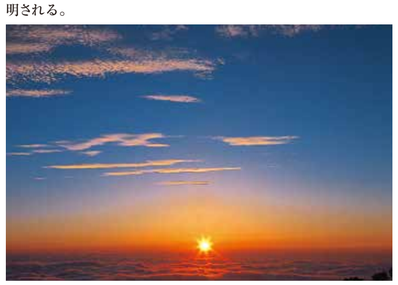
聖俗の境

富士山の境界、信仰領域は、自然のあり方や植生などとも対応している。

里山にあたる範囲を「草山」、森林帯を「木山」、草木の生育しない裸地を「焼山」という三つの空間で表現する。北口本宮冨士浅間神社の鎮座する諏訪森は江戸時代に植栽されたアカマツの林である。諏訪森を抜けて中ノ茶屋から**馬返** 3-1までが「草山」で、中ノ茶屋にはレンゲツツジやフジザクラの群落がある。馬返から先が「木山」となり、カラマツやコメツガ、モミなどの原生林に包まれる。樹々の根や剥き出しの岩石、点在する信仰の遺跡が苔むしており、富士山の懐に抱かれている気分を味わうことができる。さらに「天地界」（てんちのさかい）と呼ばれる五合目が近くなると、樹々が低木化し、森林限界に特有の風景に変化する。赤褐色の山肌が露出した五合目から上は「焼山」と称される。

御来光と御来迎

多くの登山者は富士山頂で昇り来る朝日を拝する「御来光」を念願している。しかし、かつて待望されたのは、御来迎（ごらいごう）であった。朝日を背にして内院を拝すると阿弥陀三尊の影が出現することがある。太陽の光によって自身の影が、反対側の雲や霧に反射して大きく映り、同時に周りに虹色の光の輪となって現れる。現在は、山岳で起こりやすい「ブロッケン現象」として説明される。



吉田宿の南限に諏訪森があり、そこに北口本宮冨士浅間神社が祀られている。登山道はここを基点として富士山頂へ延びる。ここから馬返までが草山三里と俗称され、そこから先は灌木（かんぼく）帯となるが、「天地界」までの林の中の道を木山三里という。その先の頂上までの樹木のない焼石の道を焼山三里という。草山と木山の境に**鈴原大日** 4-1が、近接する御室に御室浅間神社が祭祀される。木山と焼山の境界である天地界に**中宮社** 4-2・中宮大日が祀られ、そこに浅間大菩薩とその本地仏の大日如来が奉納された。須走口と合流する大行合（おおいきあい）は八合目（本八合目）である。そこより上位は、富士山本宮浅間大社の神域と見なされている。

スポット4 構成資産・構成要素：1-6、9、10

近世―富士講

富士講の隆盛

戦国時代末期に現れた長谷川角行（かくぎょう）は、修験系行者の一人で、この世と人間の生みの親はもとの父・母、すなわち富士山が根本神であるとし、江戸とその周辺の庶民の現世利益的な要求に応えて、近世富士講の基礎をつくった。正保3年（1646）に106歳で死んだというが、その信仰は弟子へ伝えられ、月心とその弟子の村上光清（こうせい）の光清派と、月行から食行身禄（じきぎょうみろく）へと受け継がれる身禄派の二派に分かれた。

光清は、北口本宮冨士浅間神社を大改修したことにも示されるように、その財力によって身禄派を圧倒しており、吉田では「乞食身禄に大名光清」といったという。

身禄は世直しの理想のため、享保18年（1733）に富士山7合5勺目の鳥帽子岩にて入定し、それに従ったのが田辺十郎右衛門である。身禄は入定にあたって信徒の登山本道を吉田口と定め、吉田の御師宿坊を山もとの拠点とした。

「江戸は広くて八百八町、八百八町に八百八講」といわれるほどに数多くの富士講の成立をみた。これらの富士講中の登拝口として、吉田とその御師宿坊は繁栄を極めた。

御師町と富士登山

身禄は修行の拠点と登山本道を吉田口としたため、吉田は富士信仰の中心地として大きく発展することになった。江戸時代、最盛期には、86戸の御師宿坊が存立した。その中には、富士講の影響を梃に新たに御師として参入する者もあった。

信仰領域

日常の生活を送る「この世」から信仰的な世界「あの世」へと入って行く場合には、そのための準備と実践が必要であった。

まず、霊山の入口や山麓の河川や湧沼などの要所で重層的に垢離（こり）をとり心身を清める必要があった。古くは「垢離を掻く」といい、身体の垢を掻き落として身を清めていた。人びとは、御山と向き合い、各所で垢離をとり身体を清浄に保ちながら、頂上を目指していた。

「御胎内」（船津胎内樹型）も、そのような信仰的な場所として存在した。胎内（樹型）は、富士山の噴火に伴って誕生した溶岩洞穴群の中でも、溶岩樹型という種類の洞穴群を指す。富士講の行者は内部を母親の胎内と見なし、神聖視し、洞穴内を巡拝する「御胎内潜」（おたいないくぐり）を行った。洞窟を潜り抜けることを出産に見立てて、御胎内潜をすることで生まれ変わるとされている。江戸時代の御胎内は、現在の船津胎内であり、明治時代になって、近接する場所を選んで新たに整備されたのが、新胎内の吉田胎内樹型である。

スポット6 構成資産・構成要素：1-1、1-7～9、11～20

近世―巡拝

巡拝行の始まり

富士山へ登山することは御頂上（おちょうじょう）と呼ぶようになる。信仰の山を汚さないように素早く登って降りてくることがよいとされた。これとは別に、山に留まって寝泊まりしながら修行する形態がある。修験系の修行として行われたもので、巡る修行（巡拝行）として区別する。

富士講の影響によって、“巡る”信仰が加味されて、「御八葉巡」（おはちょうめぐり）に加えて、「御中渡」（おちゅうど）、「内八海巡」といった新たな修行が行われるようになった。

御八葉巡（おはちょうめぐり）

現在は、すり鉢状の火口を巡るという意味で「御鉢巡」（おはちめぐり）と呼ばれる山頂を一周する修行は、かつて「御八葉巡」と呼ばれていた。

神仏分離以前、富士山の噴火口は、「内院」と称される富士山最大の聖域で、大日如来と八尊の仏が座すとされた。内院を中心にこの八尊の祀られている峰々を一巡する巡拝修行という意味で、「御八葉巡」と呼ばれていた。

御中渡（おちゅうど）

富士山の中腹を周回する道をかつては「中道」といい、現在は「御中道」と敬称を冠して呼んでいる。その最大の難所が「大沢崩」であり、そこを渡る荒行なので、「渡」の文字が用いられた。

富士講先達が頭にかぶる宝冠（ほうかん）は、御中渡の際、頭部を守るだけではなく、緊急時にはザイルとしても使用した。御中渡は山内の修行でも最も危険なものであり、この修行を行う際には特別の心構えが必要とされた。

内八海巡・元八湖巡

内八海は、富士五湖（山中湖・河口湖・西湖・精進湖・本栖湖）に加えて**明見湖** 6-1・四尾連湖・須戸湖を総称していい、これらを巡拝する水行が内八海巡である。1泊から2泊の行程で行われるもので、修行の1つの区切りの意味がある。富士登拝後に行われる修行だった。

西湖では、溶岩洞穴のひとつ、**竜宮洞穴** 6-2に立ち寄っていた。竜宮洞穴は、雨乞いの場として富士講以前から地元の信仰対象となっていた。

元八湖巡は、内八海巡の巡拝行を集約するように、忍野村忍草の八つの池で水行を行うようになったもの（忍野八海）。八つの池にはそれぞれ守護する龍神が祀られている。